

# 神奈川大学21世紀 COEプログラムに 寄せて

巻頭言



神奈川大学副学長  
永田 一清

本学21世紀COEプログラム拠点「人類文化研究のための非文字資料の体系化」では、2004年2月に外部評価を実施した。外部評価委員として静岡大学八重樫純樹氏、国立歴史民俗博物館常光徹氏を委嘱した。この2名の評価委員が外部評価報告の筆頭に挙げたものは、「非文字資料とはなにか？」を分かりやすく説明する工夫が必要である、ということであった。確かにこの点が分からなければ、本学プログラムの目的は理解できない。

拠点認定後、1年を経た現在では見慣れたものになったプログラム研究構想図の「非文字」世界には、〔におい〕〔道具〕〔図像〕〔景観〕〔壁画〕〔絵画〕〔民具〕などの具体的な研究対象が挙げられている。これらは逆に説明の必要がないもののようにも思われる。

福田アジオ拠点リーダーの研究構想には「文字に表現されない人間の様々な行為、思考を資料化する方法は必ずしも開発されてこなかった」とあり、また、21世紀COEプログラム委員会（江崎玲於奈委員長）の本学プログラムに対する採択理由には、「非文字資料を体系化する普遍的な方法は未だ確立されておらず、きわめて独創的な試み」とある。これらの説明もまた理解不能ではない。

それでは従来の歴史学や民俗学の視点から見たときの難解さは何に由来するのか。

「非文字資料とはなにか？」という問いは、研究テーマの独創性と難解さへの問いなのではあるまいか。

つまり「非文字」「資料化」「体系化」これら説明の必要がないように思える言葉が「人類文化研究のための非文字資料の体系化」というテーマに集約されたとき、それぞれの言葉の独創性と難解さが立ち現れてくるのだ。外部評価委員の指摘はこの意味で適切である。

本学が日本常民文化研究所を招聘したのは1982年である。また、この研究所を基礎に、1993年、特定の学部を持たない大学院の研究科として開設されたのが、歴史民俗資料学研究科である。非文字の世界を「資料」として注目・重視した渋沢敬三の姿勢は、日本常民文化研究所の研究成果や、それに基づく歴史民俗資料学研究科の深化・拡大された研究を経て、21世紀COEプログラムの採択へと継承・発展したともいえるだろう。

先ほど引用した採択理由に「非文字資料の収集・整理・体系化は、日本常民文化研究所とわが国唯一の歴史民俗資料学専攻大学院をもつ神奈川大学が拠点となるのが最もふさわしい」とある。「人類文化研究のための非文字資料の体系化」のプログラムは、神奈川大学のみが達成できるテーマなのである。最近〔嗅覚〕や〔味覚〕もCOEの研究課題として探求が始まったと聞いている。データベースの構築・公開のための体制強化や若手研究者育成プログラムなど、外部評価で指摘された解決すべき課題はあるが、未知の研究領域に分け入る独創的な研究成果を期待したい。